

にいがた 平和スクール

にいがた

平和記念式典
ワークショップ版

平和記念式典



平和記念式典に参列して

平和記念式典は、終戦から2年後に「広島平和祭」として催され、1954年に今の形式に変わりました。原爆死没者の霊を慰め、世界恒久平和を祈念するために行われています。

広島市民や遺族はもちろん、日本政府の方々、約90ヶ国の代表、様々な年代や国の人達が参列しています。

式典の流れは、原爆死没者名簿奉納、式辞、献花、黙とう、平和の鐘、平和宣言、放鳩、平和への誓い、代表の方々の挨拶、そして「ひろしま平和の歌」の合唱となっています。

黙とうでは、8時15分から16分にかけて、一人一人の平和への想いを、平和の鐘とともに願います。また、出席者の挨拶では、考えさせられることばかりでした。

広島市長の平和宣言の際、「核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして想いを同じくする世界の人々と共に力を尽くす」ということを誓っていました。そのために、私達ができることは、立場や主張の違いを互いに乗り越え、理想を目指し共に努力するという「寛容」の心を持つ。そして、未来を担う私達が、原爆や戦争を単なる過去の出来事と捉えず、また、被爆者や平和な世界を目指す人たちの声や努力を無駄にせず、たゆむことなく前進していくことだと考えました。



8月5～7日、広島での平和研修で中学生が学んできたことを新聞にまとめました。

- 【記者】
- 味方中 笹川 拓真
 - 葛塚中 富岡 千春
 - 曾野木中 須田結心乃
 - 新潟柳部中 田島 生
 - 高志中 中野 愛
 - 寄居中 広瀬 未侑

2019年
10月1日
新潟市総務部総務課

ワークショップ

ワークショップから見えてきたJUN



僕たちは、平和とは何かを題材にしてワークショップに参加しました。ワークショップとは、周りの人と意見を出し合い、題材に対しての考えを深めていくことです。

今回参加したワークショップでは、最初から話し合いをするのではなく、1本の長い紐を使って体を動かしながら、一人一人の意見の違いを共有していききました。次に、4つのグループに分かれて、新聞の記事の中から自分が思う平和なもの、平和でないものを分けていきました。一人一人が持つ意見や考え方が違うため正解はないということから、みんなが積極的に多くの意見を出し合うことが出来ました。その中には、被爆後の写真が見つかったという記事に関して、未来の人たちに原爆のひどさを伝えるから平和地震が発生したという記事に関しては、被害が出ているから平和ではないなどの意見が出ました。そして、出た意見を基に改めて平和とは何かを3つの観点からまとめていきました。その後はグループ内だけでではなく、全体で意見交流をしました。グループ内だけではわからなかった意見やユニークな意見があり、面白かったです。

最後に、私十〇(マル)＝平和というもので、〇(マル)の中に入る自分に足して平和になるものを考えました。その中には人や意見、笑みなどがありました。どれも自分が思う平和への想いが理由として書かれていて、平和へ向かっていくためには色々な方法があることが分かりました。ワークショップを通して、人それぞれ考え方が違い、その考え方を認め合うことが大切だと分かりました。また、自分からという意識を持って意見を出すことで充実した話し合いになると分かりました。これからも常に平和への意識を持ち続けたいと思いました。

原爆被害者の証言

8月6日(火)、「原爆被害者証言のつどい」に参加しました。新潟市の中学生がグループに分かれそれぞれ同った証言をレポートします。

証言レポート

証言者は、河本謙治さんです。河本さんは現在92歳で、被爆当時は18歳でした。原爆投下前は、国鉄で働いており、爆心地から約1.5km離れたところにいました。

原爆が落とされた時、河本さんは汗をふくために、上着を脱いでいました。そのため、上半身の皮膚が垂れ下がりが、腕が動かなくなったそうです。原爆投下直後は、何が起きたのか分からず、周りを見ると広島町の町が消えていました。また、「水をくれ」と泣き崩れている人々が多く見ましたが、水を飲ませてあげられなかった自分に、今も後悔しているそうです。そのことから私は、当時の人々は生きることに必死で、明日生かされるかも分からない不安を背負っていたということが想像できました。

今もなお、原爆の後遺症で苦しんでいる人々や、不安を抱き続けている人々がいます。その中で、河本さんは「人間は人間らしく働いてほしい。」という言葉を私たちにかけてくださいました。ですが、現在は河本さんをはじめ、被爆体験者から話をしていただけの機会が少なくなってきました。そのため、私たち若い世代が原爆の悲惨さをたくさんの人に伝えていかなければならないと思いました。そして、今の日本の自由と平和は、たくさん人の犠牲者と悲しさからできているということを、私たちは決して忘れてはいけなく強く感じました。



事業に参加しての感想

僕はこの広島派遣事業に参加して原爆のひどさやつらさ、平和を目指し工夫している事などその地での学びや学べないことを十分に取り入れることができたと思います。この貴重な体験を忘れず、平和という言葉に胸に留めてこれからの生活を送っていききたいと思います。
(笹川 拓真)

私は、この事業を通して、戦争や原爆の体験を風化させたり、もう一度繰り返したりしてはいけないと思いました。被爆者の高齢化が進む中、戦争の体験を語り継ぐことができ、その役目を任されているのは私達若者だということを改めて感じました。
(富岡 千春)

私はこの事業に参加して原爆の恐ろしさと、平和の大切さを学びました。そして、実際に原爆を体験した方から話を聞くことができなくなっているという状況が近づいてきています。そのため、私たち若い世代が原爆の悲惨さを伝えていくことがとても大切なことだと感じました。
(須田 結心乃)

僕は、広島での研修を通して、1つの国でも核兵器を持つてはいけないという厳しい世界になってほしいと思います。二度と起きてほしくない心から思いました。そのため未来に生きる自分が平和学習をしたことに自覚を持って語り継いでいきたいと思えます。
(田島 生)

私はこの事業に参加して、「平和」という言葉を何度も耳にしました。「平和とは何か。」これは世界中の人々が考え続けなければいけないことではないでしょうか。そして、恒久平和を持続させるために今の私たちにできることを考えました。それは、今回学んだことをたくさんの人々に発信していくことなのだと思います。
(中野 愛)

資料館で、原爆のむごさを突きつけられ、戦争の愚かさ、悲しさを思い、核所持の事の重大さを肌で感じる事ができました。一つ一つの言葉からの重みを感じ取り受け止め、積極的に物事を進めていきたいと思えます。笑顔の輪が広がることを願っています。
(広瀬 未侑)